

おのきた

## 尾北校長室から

第32号



### 虹と言葉 ~ 分かり合えていないところから

陽射しも強くなり、雨上がりの空に時折架かる虹が映える季節となった。「なないろのにじ」という言葉があるけれど、私にはかつて、虹は3色にしか見えなかったことを思い出す。今はどうかと、この文章を書くにあたって念のため数えてみたが、やはり、上から赤・黄・青の3本にしか見えなかった。虹は7色——プリズムで分光しないと明確には分からないこの光の色の知識は、小学校3年の理科で教わるのだそうだ。



人間は、世界から事実を抽出し、それを例えば、「七色の虹」というような言葉に換える。そして今度は、その言葉にあわせて、虹の色は7つあるものとして世界を見ようとする。言葉を介して世界を切り取り、それは時に現実の世界を歪めて見ることになっている場合さえある。

さて、この話には続きがある。虹は7色というのは、正確な「事実」ではないようだ。かのアイザック・ニュートン（英、1642～1727）に起因する、日本の学校教育によるものである。物理学者の彼は、色と色の間は無限に変化していることを知っていたにもかかわらず、虹の色を七色とした。

それは、当時、「7」が、聖書に由来する神聖な数（神は6日かけて世界を創造し、7日目に休んだ）と考えられていたからのようである。（そういえば、曜日は7種、音階もドレミ・・・の7音などなど）虹が7色とは現在の日本での一般的な「知識」であり、その数は国や時代により異なっている。アメリカでは6色、日本でも古くは8色や6色とされていたこともあったようだ。

ちなみに右の絵は、私の息子が小学1年生の時に描いた絵である。黄色のミツバチの背景には虹があり、プリズム分光器の通りに、上から赤、オレンジ、黄、緑、水色、青、紫の七色となっている。たぶん、先生に教えられてのことなのだろう。基礎基本の徹底を目指す日本の初等教育の、成果といえは成果ではある。



言葉は、「音」も変えてしまう。鶏は「日本語」でコケコッコと鳴き、アメリカでは「英語」で“cock-a-doodle-doo”（コックアドゥウルドゥ）と鳴いている。多分、同じ鳴き声だと思われるが、その国ではそのように鳴く（聞こえる）ものとなっている。



カープの本拠地、Mazda Zoom-Zoom スタジアムの「ズーム・ズーム」とは、車などが風を切るときの擬音語で、車企業にぴったりのネーミングだなあと感心する。アメリカの車は“Zoom-Zoom”と風を切る一方、日本では「ビュンビュン」とばして走る。ならば日本語名称は、「マツダビュンビュン球場」とでも呼ぶことになるのだろうか？

私たちは、言葉を使って意思疎通することが多い。そのゴールは、共通理解に至ることにある。だとすれば、**相手を理解しようとする姿勢**を片時も失ってはならない。同じものでも「**人によって受け止め方が違う**」ということの大前提に、いつの時もまずは、「**分かり合えていないところから**」を**スタート地点**にしなくてはならないのである。